

行政・市民パートナーシップ時代のフェスティバル

——別府アルゲリッチ音楽祭の運営を中心に——

井 関 隆

はじめに

地方自治体による公共ホール建設ラッシュは92年頃には峠を越え、90年代は、そのホールをどう活用し、いかに優れた文化事業を行うかが問われた。ハードの整備からソフトウェアの整備への転換である。文化庁や自治省、県などがホールを運営する人材育成や、舞台機構の革新に対応するための舞台技術者の再教育を行うようになった。また芸術家養成についても、尼崎ピッコロシアターのように演劇学校を設けているホールは少ないが、演劇ワークショップは急増した。

先駆的なホールでは、水戸芸術館、彩の国さいたま芸術劇場、世田谷パブリックシアター、静岡県舞台芸術センターのように、芸術監督、専属芸術団体、専門的スタッフを確保し、あらかじめ時間をかけてマスタープランを作成したり舞台創造・発信を行ったりしている。専属の団体を置かないまでも、墨田区のトリフォニーホールのように、フランチャイズオーケストラを置くケースも増加している。また、市民の社会参加が進む状況のもとで、いまだて芸術館、喜多方プラザ文化センターのように、自主事業の企画・運営や舞台の裏方に市民が参加するケースが急増している。最近では、島根県八雲村の「しいの実シアター」のような公設民営劇場が誕生、またふらの演劇工房のような日本最初のNPOによる公設民営劇場も生まれようとしている。

一方において、ホールの活用を含みながらも、自主文化事業というより、文化政策として、地域の特色を生かしたり、地域づくりと結び、各種のフェスティバルを開催する文化政策もある。演劇では、利賀村国際演劇フェスティバル、八雲国際演劇祭、飯田人形劇フェスティバルなど。地方の音楽祭は全国で約30あり、リゾート地を中心に開催されている。芸術監督を置いた国際的音楽祭の草分けは草津夏期国際音楽アカデミー&フェスティバルである。教育プログラムも草津から始まった。著名音楽家を中心に据えたものとしては、故バーンスタインによって始まったPMF、スターンが中心の宮崎国際室内楽音楽祭などがある。海外の音楽祭と提携した北九州国際音楽祭（フィンランド・クフモ音楽祭）や国際音楽祭として霧島国際音楽祭、さが国際音楽祭、武生国際音楽祭がある。北海道では5月から10月にかけて、PMF以外に6つの音楽祭が開かれている（うち2つは国際音楽祭）。さらに山梨、岐阜、長野、香川などにそれぞれ特色を持った音楽祭がある。また国内の演奏家を中心にした音

楽祭は、大分県で長い歴史を持つゆふいん音楽祭や、おかやま音楽祭、木曾福島音楽祭など多数がある。

本稿では、20世紀を代表するピアニストの一人、アルゲリッチを中心とした別府アルゲリッチ音楽祭を事例として、文化政策としてのフェスティバルを検討することにしたい。(文中敬称省略)

1. 音楽祭の背景としての別府市及び大分県の芸術環境

1997年度では、別府市の人口は約12万7000人、一次産業：2.2億、二次産業17.1億、三次産業80.9億である。東洋一といわれる温泉地として観光産業が中心であり、80億の数字は当然である。この音楽祭の公演の一部が行われた大分市は、人口42万4000人、一次産業：2.8億、二次産業：27.5億、三次産業：69.7億である。大分県は知事の提唱する「一村一品」による地域興し運動で知られる一方、大陸に近いという地の利もあって、福岡県と共にアジアに目を向けている。2000年4月、県が推進してきた立命館アジア太平洋大学が開学するのもその現れである。別府市には特に韓国からの観光客が多く、路線バスのアナウンスが韓国語でも行われ、観光案内の掲示板やバス停留所にも韓国語の表記があるくらいである。しかし最近是国内及び韓国の経済不況から観光客の減少に悩んでいる。1997年度の別府への観光客は1134万人。前年から比べると22万人の減少である。(市調べ)

大分県の芸術文化への姿勢と別府市、大分市を取り巻く音楽環境にふれておきたい。県は85年を豊の国文化創造元年と位置づけ、芸術文化基金を設け、21世紀を展望した文化創造を目指してきた。また、98年の国民文化祭開催を機に、「文化立県ビジョン」を策定した。県下の芸術団体、文化団体は、「大分県芸術文化振興会議」を作って県の文化活動を担っており、県の教育庁文化課内に事務局員を常駐させ、大分県の芸術文化活動を総括する『大分県文化年鑑』を発行している。

音楽でいえば、大分市は滝廉太郎ゆかりの地であり、園田高弘、中山悌一、立川清登も大分県出身である。教育機関としては大分大学教育学部、大分県立芸術文化短期大学及び同付属高校があり、音楽分野で人材を輩出している。最近でいえば、98年のチャイコフスキー国際コンクール声楽部門第1位 佐藤美枝子(sop.)はこの付属高校の出身である。85年からは「おおいた芸術週間」(音楽監督：園田高弘、総合プロデューサー：横溝亮一)が内外の音楽家・団体を招聘して毎年開催されており、園田高弘賞ピアノコンクール(97年には韓国のピアニストが優勝)、同ジュニアピアノコンクールもその一環である。

オーケストラは、大分交響団、別府市民交響楽団があり、ジュニアオーケストラが大分市、中津市にある。ほかにオペラも盛んで、大分県県民オペラ協会は現在220団体を数える地方オペラの草分けであり、大分に題材をとった委嘱作品『吉四六昇天』、『ペトロ岐部』、『滝廉太郎』を内外で上演している。大分県民オペラ合唱団、中央合唱団ほか合唱団も多い。

音楽公演用の文化施設は、別府市ではビーコンプラザ(県と市が280億円を投じた西日本最大級のイベントホールであり、会議場は8000人収容、馬蹄型フィルハーモニアホールは1200席)、リサイタルなどが行われる別府大学キャンパス文化ホールがある。大分市には県立芸術会館があってオペラ

からコンサートまで広く使われている。98年には、大分市に本格的ペラができる三面舞台を備えた2000席の「グランシアター」・700席の「音の泉ホール」を持つ県立総合文化センターがオープンした。隣接するNHKにはスタジオホール「キャンパス」があって小規模な音楽会に使われている。

大分県は音楽教育環境、音楽公演環境に恵まれているといえよう。ただ、明るい面ばかりではなく、同じ別府市で開かれてきた「城島ジャズイン」は、1998年夏、多額の赤字を理由に中止されている。

2. 音楽祭開催までの経緯

別府アルゲリッチ音楽祭開催の最初のきっかけは、ピアニスト伊藤京子のかつての師であり、親しい友人でもあるピアニスト、マルタ・アルゲリッチが94年、大分市でのリサイタルの後、別府市を日本での活動拠点の一つとしていた伊藤に招かれ、別府市を訪れたことにある。アルゲリッチは別府の風光が母国アルゼンチンに似ていることもあって別府に親しみを抱いたようである。伊藤は、同年、両親が住み、自身も当時建設中（磯崎新設計）であった別府市の文化施設の運営母体、(財)別府コンベンションビューローの音楽顧問に就任していた。少しさかのぼることになるが、そこに至る経緯をみてみたい。

94年1月 3日間にわたり大分市で第9回JEEコンサート「アルゲリッチ・チェンバーミュージック・フェスティバル」が開かれた。ほかにも山口県柳井市、京都市、東京で開催されている。主催は国際教育交流馬場財団でこの時のプロジェクトの発案者は同財団実行委員の伊藤京子。プログラムはアルゲリッチが自ら手がけたもので、海外から参加したチェロのミッシェ・マイスキー、ピアノデュオのデュオ・クロムランクも彼らと旧知のアルゲリッチが声をかけた結果である。日本の有数のソリストを加えたこの室内楽フェスティバルは、伊藤によれば、「これは芸術家が自ら考えた企画で、聴衆と双方向で楽しめ、その上、低料金でということ念頭にいたものだった」が、「アルゲリッチのお陰で音楽会は大成功」だったという。⁽¹⁾

音楽エージェントを介さず、音楽家自身が音楽家の招聘に携わり、教育的プログラムと低廉な料金を実現させたのである。大分市での公演はNHKと大分銀行が主催者となった。

先述のように別府に招かれたアルゲリッチは、前別府市長と伊藤がビーコンプラザの名誉音楽監督就任を打診すると、思いがけず快諾したのであった。周知のようにアルゲリッチは、教えることもためらう純粋な演奏家として知られ、音楽監督のような立場に就いたことはなく、これを伝える報道は内外で驚きをもって受け取られた。

95年3月、ビーコンプラザが完成。

95年9月、フィルハーモニアホール(1200席)で「別府アルゲリッチ・コンサート'95」開催。伊藤によれば、「三日間開催され、子供たちへの無料コンサート、協奏曲、なんと十年ぶりのリサイタル」を含むものであり、成功をおさめた。⁽²⁾

子供たちへの無料コンサートとは、小中学生1000人を招待したことである。また子どもたちをゲネプロに招待した。

近年、録音は別として、ライブではもっぱら室内楽のコンサートのみに出演してきたアルゲリッチが、ソロリサイタルを他の国ではなく、日本の大分という地方都市で開いたことから、アルゲリッチの別府での音楽祭開催にける気持ちがうかがえる。実際、この「別府アルゲリッチ・コンサート」が3年後の正式な音楽祭への強力なアピールとなった。

95年10月、アルゲリッチはビーコンプラザ・フィルハーモニアホール名誉音楽監督の就任式に出席。就任に際して、アルゲリッチは、アジアの若い音楽家の養成、地方発信の国際フェスティバル開催を考えていること、商業主義の介入をさげ、自らアーティスト招聘にあたる意向を表明、予算が少ないことを知って監督としてのいっさいの報酬を辞退する一幕もあった。

95年11月 アルゲリッチ推薦コンサート

「豪華！ソリストたちの競演」と題してモギレフスキー、前橋汀子、堤 剛のコンサート

96年4月 アルゲリッチ推薦コンサート

小沢征爾指揮 新日本フィルハーモニー交響楽団演奏会

97年7月 別府アルゲリッチ音楽祭プレコンサート・シリーズ vol. 1

アジア・ユース・オーケストラ演奏会

97年8月 翌年の別府アルゲリッチ音楽祭の「実行委員会」を設置。総監督 マルタ・アルゲリッチ。副実行委員長兼幹事長 伊藤京子。実行委員会は県下の政財界の代表が顔をそろえた。事務局員は7名。ボランティアが協力。

97年9月 別府アルゲリッチ音楽祭プレコンサート・シリーズ vol. 2

ギドン・クレーメル演奏会 ピアソラへのオマージュ

97年12月 別府アルゲリッチ音楽祭プレコンサート・シリーズ vol. 3

別府アルゲリッチ・コンサート'97 アルゲリッチ・ラヴィノヴィッチ ピアノデュオ・リサイタル

以上のように、98年の音楽祭を目指して周到な準備が進んでいった。

3. 別府アルゲリッチ音楽祭（第1回、98年11月）の概要

実行委員会設置から約1年の準備期間を経て開催。8日間に聴衆延べ約1万人を集める（アンケートによる集計）。音楽祭のコンセプトは、アジア、教育、文化発信であった。アルゲリッチが音楽総監督をつとめ、伊藤京子が総合プロデューサーとしての役割を担い、全面的にアルゲリッチを補佐した。出演者の決定、出演交渉はエージェントを介さず、アルゲリッチが自ら選定し、直接交渉も行った。例外は県が特に出演を要望した指揮者のチョン・ミュンフンであったが、アルゲリッチが電話したことで無理なスケジュールながら出演が実現した。県が韓国出身のミュンフンにこだわったのは、アジアのアーティストとの連携という音楽祭のコンセプトと、韓国とのサッカー・ワールドカップ共催を念頭に置いてであった。もともと別府は韓国からの観光客も多く、県には観光客誘致の願いもあったであろう。

教育面では、韓国から2名の学生を招待、別府での公演のほか、東京で行われた桐朋学園オーケス

トラの練習にも参加させ、研修と日本の学生との交流をはかった。また、中国から学生1名とその指導教師を招待、講習会に参加させた。むろん高校生、大学生から成る桐朋学園オーケストラにも、いまもっとも話題を呼んでいる国際的指揮者から学ばせる意図があったのはもちろんである。特にユニークなのは、まだ音楽教育を受けていない子供に音楽への興味を持たせる独自の教育で知られるフランスのピアノ教師、リル・ティエンポを招いて、「子どものための公開レッスン」を実施したことである。子供たちはすぐに音楽に熱中、ピアノにも興味を持ったという。^③

さらに大分県出身の若手演奏家のコンサートを実施した。講習会は公開され、受講者だけでなくピアノを勉強している学生、児童、その父兄に刺激を与えた。子供やシルバー世代を招待するコンサートやオーケストラコンサートのゲネプロへの参加も希望者を募って行われた。

(1) 主要出演者

a. 室内楽演奏会・アルゲリッチと仲間たち

バイオリンリサイタル(アルゲリッチ/イヴリー・ギトリス)、ピアノ五重奏曲(アルゲリッチ/イヴリー・ギトリスほか)ピアノ四重奏曲など。「別府アルゲリッチ音楽祭を育てる会」と一般向け各1回。

b. ピアノリサイタル

第1夜 ヴィタリー・マルグリス 第2夜 エフゲニー・モギレフスキー 第3夜 フー・ツォン

c. 公開マスタークラス公開レッスン(4日間)アルゲリッチ、ヴィタリー・マルグリス

d. 公開マスタークラス公開レッスン受講者による演奏会(大分市NHK大分放送局)

e. リル・ティエンポによる子どものための公開レッスン

f. オーケストラコンサート チョン・ミュンファン指揮桐朋学園オーケストラ

g. 県出身者若手演奏家コンサート(無料)

そのほかの主な出演者: リダ・チェン、ユーラ・マルグリス、清水高師、小森谷巧、平澤 仁、馬淵昌子、木越 洋、永島義男、茂木大輔、久永重明。

アルゲリッチはじめ出演者は、アットホームな音楽祭に大満足であった。聴衆も満足し、批評家も高い評価をつけた。マスコミの反応も大きく、フェスティバルの一部はオンエアされた。海外でも報道され、主催者には大きな励みになった。

(2) 運営について

a. 運営費について

総予算約1億1000万円。県と市が同額、それぞれ2000万円を助成した。「(助)地域創造」から900万円。財界、団体から2000万円を目標に寄付を募った。チケット収入約3000万円強。総予算を、行政が直営で実施しているほかの音楽祭と比べると、松本市のサイトウ・キネン・フェスティバルは約6億5000万円、宮崎県主催の宮崎国際室内楽音楽祭(出演者50人と規模も大きい)は約1億8000万円(いずれも96年度の数字)であり、少なめといえよう。手作り音楽祭のため、エージェントに代わ

り、使命感に燃える事務局スタッフとボランティアの人々が活動し、支出の削減を可能にしたのはいうまでもない。

b. 運営スタッフについて

総監督はマルタ・アルゲリッチ。実行委員会は、名誉会長 平松守彦大分県知事、名誉副会長 井上信幸別府市長、実行委員長 安藤昭三大分銀行頭取（音楽祭開催時は会長）、副実行委員長 伊藤京子ほか5名。実行委員39名。事務局の運営を行う幹事会は、幹事長 伊藤京子ほか副幹事長5名、幹事10名。事務局員7名。事務局員は(財)ビーコンプラザから出向の1名を除き民間人である。先ほど例に出した松本と宮崎の場合は、県や市から職員3-4人が派遣されているのに比べると少ない。音楽祭ボランティアスタッフ約100名とあわせ、ハーモニア別府（フィルハーモニアホールの音楽事業をバックアップする組織）、国際ソロプチミスト別府、別府ベンチャークラブのメンバーも運営に協力した。また「アルゲリッチ音楽祭を育てる会」が作られ、647名が登録をした。

4. 第2回音楽祭への歩み

新聞報道によれば、第1回の音楽祭終了後、県知事からは、インタビューに答える形で第2回を開催したいとの発言が報道関係者に対しなされたが、一時は行政が次回開催に積極的でないと観測も流れたようである。しかし、第2回目は無事開催された。

5. 別府アルゲリッチ音楽祭 '99 の概要

第1回と違うところを中心に述べたい。

(1) 主要プログラム及び出演者

99年はショパン没後150年にあたることから、「ショパンとその周辺」をテーマに掲げ、ショパンと同時代のリスト、シューマン、パガニーニ、またスラブ系では、ドヴォルザーク、チャイコフスキーなどにスポットを当てた。

参加アーティストはアルゲリッチの親しい友人たちとして、前回参加のピアニスト、フー・ツォン、ユーラ・マルグリス、ヴァイオリニストのイヴリー・ギトリス、清水高師、木越 洋に加え、ピアニストのネルソン・フレイレ、海老彰子、チェリストのミッシェ・マイスキー、趙 静、ヴィオラの大野かおるなど、前年度同様、第一線の演奏家がそろった。注目を浴びた若手ピアニストの1人は15歳のモスクワ音楽院学生で、講習会の受講生、韓国のリム・ドン・ヒョック。アルゲリッチのすすめで急遽リサイタルを開いた。もう1人は、99年アルゼンチンで開催された第1回アルゲリッチ国際コンクール優勝者の広瀬悦子（エコール・ノルマル在学、20才）。

a. 大分県出身若手演奏家コンサート

b. オーケストラ演奏会2回

協奏曲はアルゲリッチ（リスト1番、ショパン1番）/ イヴリー・ギトリス（パガニーニ1番）/ ミッシェル・マイスキー（ドヴォルザークほか）/ フー・ツォン（ショパン2番）伴奏は岩村力指揮 / 桐朋学園オーケストラ

- c. 室内楽「マラソンコンサート」正味4時間にわたり、多彩な室内楽プログラムを繰り広げた。ギトリス、アルゲリッチ、フレイレ、ツォン、マルグリスのデュオを中心としたコンサート。
- d. マスタークラス講習会は、アルゲリッチのクラス（助手マルグリス）については、受講生のみが聴講できる非公開なものに変わった。フー・ツォンのクラスに加え、今回追加されたイヴリー・ギトリスのマスタークラスは前回通り公開された。
- e. マスタークラス受講生による演奏会。
- f. 子どもとシルバーのための公開リハーサル
- g. 子どものための無料コンサート。

（2）運営について

総予算は9300万円となり前年度より少し縮小した。大分県は2000万円、別府市は1000万円を助成。財界・団体からの協賛金は2500万円、入場料収入が3600万円であった。別府市の拠出が1000万円減少したように見えるが、98年が国民文化祭にあたっていたため、特別に協賛金を1000万円上積みしていたのであった。音楽祭の参加者は合計8000人。（県外からの参加はうち25歳）昨年より2000人減である。今回は開催日が1日少なくなったこと、メインコンサートが1日減少したことが影響しているようである。会場は昨年と違いオーケストラ演奏会の1回が大分市の県立総合文化センター・グランシアターで行われた。また、県出身の若手演奏家コンサートはビーコンプラザ・エントランス・ホールで行われた。事務局員は（助）ビーコンプラザからの出向がなくなり、全員民間人となった。ボランティアスタッフは増加して約150人であった。また「育てる会」はチケット優先予約の特典を設けたためか、約100人ほど増加、739人になった。

6. 別府アルゲリッチ音楽祭運営に関する分析

第1回を中心に検討してみたい。音楽祭が成功した原因として次のことが挙げられる。

（1） 広い人的ネットワークを持ち、そのテンペラメントから、実演に接したいと願うファンが多い演奏家、アルゲリッチの全面的協力が得られたこと。

アルゲリッチが招聘した海外の演奏家は、彼女が古くから家族づきあいをしている友人であり、第1回には、アルゲリッチは3人の子供を連れて参加した。オーボエ奏者である長女は演奏会に出演、次女は音楽祭の公式カメラマンとして働いた。アルゲリッチが音楽祭に関し高い満足度を表明したのも、こうしたアットホームな雰囲気助けられ、良い演奏ができたからであり、また伊藤をはじめ実行委員、事務局スタッフ、ボランティアなどの誠意と感謝の念が伝わったからであろう。

（2） アルゲリッチの数少ない弟子で友人でもあるピアニスト伊藤京子が、演奏をすべて辞退して

総合プロデューサーに徹し、アルゲリッチを全面的に支えたこと。もちろんアルゲリッチは、別府に「京子がいるから」引き受けたといっており、アルゲリッチの、別府市への紹介者としての伊藤の功績はいうまでもない。

(3) 三つのコンセプト（芸術ポリシー）が良かったこと。⁽⁴⁾

アジアと教育というコンセプトに従い、フー・ツォンに加え、若手指揮者でもっとも注目されている1人、韓国のチョン・ミュンフンが参加したことも世界の注目を集めた。一部のパートの首席にプロを据えはしたが、あえて若い桐朋学園オーケストラを使ったことも、教育面及びフレッシュな演奏効果上もよかった。教育プログラムは、多くの国際フェスティバルに取り入れられているが、アジアの才能を育てる観点はこの音楽祭の大きな特色である。教育プログラムはそれ自体の意義のほか、聴衆獲得にも貢献している。子どもを対象としたリル・ティエンポの講習会もユニーク、また子ども・シルバー世代を招待したことも、音楽祭を市民に身近なものにした。

手作り音楽祭をうたい、事務局員とボランティアの市民がそれを支えたこと。ポスター、チケット、プログラム作りを含む広報活動、演奏家や多様な講習会参加者に関する一切の手配、各種のコンサートの設定・運営など、いずれも行政の直営ならば音楽エージェント、旅行代理店、イベント業者が介在する仕事である。一般の市民がこの仕事を、心をこめ使命感をもって遂行したことは驚くべきことである。このことが間接経費の削減はもちろん、出演者、聴衆双方に普通のフェスティバルとは違う連帯感・一体感をもたらし、結果的に音楽祭の質を上げたことは確かである。「アルゲリッチ音楽祭を育てる会」を発足させたことも協力者、聴衆を増やすことにつながった。特に第2回開催を行政に促す上で、市民、県民＝納税者の声となって有効に作用したと思われる。

(4) 経済情勢がよくないにもかかわらず、民間企業の協力が得られた。これは、実行委員長に芸術に理解のある財界人を得ることができ、県の経済界がこぞって協力したことが大きいであろう。

(5) 大分県の芸術環境、音楽環境が優れていたこと。

7. 別府アルゲリッチ音楽祭運営の問題点と展望

別府の音楽祭は、2回は成功した。しかし、真価を問われるのは、これからである。可能な限り継続開催の必要がある。音楽に限らず、実演芸術では、舞台のある一瞬に立ち会っただけで、あるいは、講習会における講師の一言で格段の進境を示したりすることがある。従って、若い演奏家を継続してそういう恩恵に浴させてゆくことが強く求められている。

継続に関して参考になる一例を挙げよう。演劇文化の基盤がない人口7000人の山村で演劇活動を行い、行政・村民・劇団のパートナーシップによって手作りの国際アマチュア演劇フェスティバル（隔年開催）を開催し始めた「劇団あしぶえ」の園山土筆代表は、「20年は続ける、それでやっと少し村も変わるかもしれない」といっている。⁽⁵⁾ そういうものであろう。

第2回の内容は、第1回にも増して充実しているが、継続してゆく上で、気になることは運営スタッフ、特に事務局のスタッフが削減されたことである。音楽祭の内容からして、仕事量はむしろ増

加したのではないか。おそらく予算縮小のしわ寄せが人件費に集中したのであろう。第1回音楽祭後にインタビューしたところでは、スタッフの多くが国際的イベントに必要な技能・経験を持った人たちであり、それも各自の仕事を辞し、給与の半減もかえりみず、事務局に入ったという。それが、今回は常勤わずか2名パートタイム3名となった。

こうしたイベントを長く維持するのに、犠牲的奉仕は、たとえ標準的給与が払われても、付きものであり、労働量と給与はバランスしないものである。まして、少なめの給与でスタッフ数が減れば、スタッフに長期にわたる犠牲を強いることになる。デリケートな存在である芸術家を相手により成果を上げるには、芸術家か、芸術家の感性をよく理解できる人材がマネジメント業務にあたらなければならない。オペラワークショップの磯貝靖洋氏がいう通りであるが、このことは残念ながら公共ホールや文化行政の担当者間で常識化していない。⁽⁶⁾

柔軟な発想に富み、多様な技能に長けた市民が芸術関係の運営に向いているために、一般の人々から公共ホールの運営者を登用したり、ホールの運営をNPOに委託する最近の動きがあるのである。第2回の運営もその流れに沿ったものであるが、行政はそうしたスタッフを幸運にも得ることができたら、厚遇しなければならない。

文化事業の経済的波及効果は、最近では学問的にも裏付けられており、この音楽祭による旅館や食堂の売り上げなども精密に統計を取り、効果を分析する必要がある。⁽⁷⁾

八雲村のように文化庁の「文化のまちづくり」事業として定着させることはできないだろうか。また、PMFオーケストラの巡業公演、宮崎国際室内音楽祭のような東京（でなくともよいが）公演の取り組みも参考にできるのではないか。また、アーティストの専属契約上、困難ではあろうが、草津夏期アカデミー & フェスティバルのように、いずれは音楽祭のCD、ビデオなどを販売してゆくことも検討できないだろうか。海外ではむしろそれが普通である。

別府アルゲリッチ音楽祭は、25回を数えるゆふいん音楽祭、県民オペラ協会による地域発信型オペラづくり、園田高広賞ピアノコンクールなどと競合するので、継続上、不利な点もあろう。しかし、文化立県の大分なればこそ、むしろそれらと併せて音楽文化の蓄積をはかってほしい。九州のほかの地域との連携も、困難な点が多いが、探ってみる価値はあろう。

別府アルゲリッチ音楽祭が続けられ、地元ばかりでなく、いつか聴きにゆきたいと願う全国のファンや、リピーターたちの期待に応えて、長く続けてほしい。また、せっかく得られた、市民の支持や、築かれた欧米やアジアのアーティストとのネットワーク、それらの人々と講習会に集まった学生や子どもとのネットワーク、苦勞して獲得された運営のノウハウが生かされなければ、まことに大きな無駄となるからである。

8. まとめ

以上、別府アルゲリッチ音楽祭についてみてきたが、フェスティバルは、次のような要件が満たされるなら、2000年代の文化政策の一つとして有効であろう。

第1に地域にふさわしい独自のコンセプト（ポリシー）を持つこと。これが明確でほかの地域と差別化できれば、集客力も増しそうでない地域より公的の助成や民間の支援を得るのに有利に働く。

第2に優れたアーティストを招くこと、優れたプロデューサーがいること。これは、ひとえに内外に発信できる、高い質のあるいはオリジナルな芸術創造を可能にするためである。ほかの地域からも公演を求められるためには、よほど優れていなければならない。市民が自らの楽しみとして出演する市民劇団、市民オペラなどは、安易に発信型と呼んではならない。もちろん例外はある。優れた指導者と密度の高い訓練で、いわゆるプロを凌ぐ質を確保して、発信型となり得ている例は、ジャンルを問わず各地に見られる。

第3に行政と市民（様々な実務能力と芸術家への正しい対応ができるスタッフとボランティア）のパートナーシップが必要である。あるいは優れた専門能力を備えたNPOに運営を全面委託することも将来的には可能である。このようなアーツ・マネージャーが、企画、出演者との交渉、ファンドレイジング（助成金申請、寄付集め、チケット、グッズ販売）、成果の説明能力を発揮すること。

第4にもっとも大切なことであるが、フェスティバルの成果が定着するまで継続すること。

* 第1回別府アルゲリッチ音楽祭については、1999年3月10日にインタビューを実施した。朝見神社が提供している境内の事務局を訪れ、事務局長神 日出男氏にお会いし、事務局次長滝口京子さんから音楽祭の前段階から開催に至るまでをうかがうことができた。新聞の切り抜きやプログラムなど貴重な資料もいただくことができた。第2回については、滝口さんから電話で概要をうかがった。資料はインターネットのホームページ（<http://www.coara.or.jp/~festival/>）、音楽雑誌などによった。事務局のご協力に感謝します。

註

- (1) Kyoko Ito Piano Story 1998 伊藤京子デビュー20周年記念実行委員会
- (2) Music Festival Argerich's Meeting Point in Beppu '98 1998 別府アルゲリッチ音楽祭実行委員会
- (3) 『News Letter '99 春』 1999 別府アルゲリッチ音楽祭を育てる会
- (4) ホームページより。

この音楽祭は、総監督である世界的ピアニスト、マルタ・アルゲリッチの企画指揮のもと、以下のコンセプトに基づき、商業主義と一線を画しつつ、音楽を通じて人を育ていける新しい音楽の場の創造を目指します。

- ① 県民、市民参加の手づくりの音楽祭を目指し、音楽を通じた国際親善を図りながら、九州大分県・別府の地から世界に向けて独自の音楽文化を創造し、発信する。
 - ② 21世紀を担う子どもたちへ世界的に質の高い音楽を提供すると共に、若手音楽家の育成を図る。
 - ③ アジアを代表する音楽家とアルゲリッチとの共演を実現させる「出会いの場（Meeting Point）」を作り、またアジアの若手音楽家の育成を図ることで、アジアにおける音楽文化の中核を目指す。
- (5) 筆者と園山土筆氏の談話（1999年3月）抽稿「島根県八雲村と劇団あしぶえの提携による村立しいの実シアターの建設と運営」文化科学研究1996 vol. 8 No. 1（中京大学文化科学研究所）参照のこと。
 - (6) 『平成7年茨城県アートマネージャー養成講座 報告書』茨城県生活環境部生活文化課 p. 25 及び p. 27 参照。行政のホールスタッフに非常に欠けていて、しばしば学習不能な観点である。

磯貝靖洋氏は、p. 25で、「演奏家を迎えるホールスタッフの心得」として、音楽家の立場から、以下の実践的な説明を行っている。

精神科医と同じような仕事で、実に気を使う必要がある。演奏をするゲストであり、金銭的な仕事をし

に来た人、もしくは音楽を仕事に来た人と思わないこと。

①事前にマネージャーと細部に渡り打ち合わせを正確にしておくこと。

・例 演奏者の人間的特徴、様々な要望。曲目の特徴、他

②演奏家を極力理解してあげること。

・一見わがままに見えたり、ヒステリに映るが、「今何を考え、どんな精神状態か」を考え、演奏家の感性に近づこうとしてあげる。

③最高の演奏ができるよう十分に支える。

・袖にいるときの環境、楽屋・舞台の空調に気を配る。演奏に適した位置を演奏家に伝える。照明の角度や強さを気にする。

④演奏が終わった時。

・大方は興奮状態であるが、「とても良い演奏でした」と声を掛ける。

p. 27 で、講座事務局の1人は、以下の感想を述べている。

打ち合わせや準備段階、講座の中、リハーサル、本番と磯貝氏の変貌の凄さに驚いた。これを機会にオペラを広める努力が必要だと感じた。

(7) 佐々木雅幸『創造都市の「経済学」』1998（第1版3刷）勁草書房を参照のこと

参考文献

- (1) 昭和60年度—平成9年度（13ヶ年間）『大分県芸術文化基金事業のあゆみ』1997 大分県芸術文化振興会議
- (2) 『大分県文化年鑑1997』1997 芸術文化振興会議
- (3) 佐々木喜久「別府アルゲリッチ音楽祭」『芸術現代』1999年2月号 1999 芸術現代社
- (4) 山田治生「第2回別府アルゲリッチ音楽祭」pp. 16-20.『音楽の友』2000年1月号 音楽の友社
- (5) 樹原涼子「第2回別府アルゲリッチ音楽祭」pp. 13-16.『ムジカノーヴァ』2000年1月号 音楽の友社
- (6) 『ショパン』1999年12月号 ショパン
- (7) 石戸谷結子「別府アルゲリッチ音楽祭」pp. 64-65.『FMfan』2000年No. 2
- (8) 『都市問題』1997年7月号 東京市制調査会